Ⅰ-②(1)　年長児の小学校体験の実践と効果（令和元年度）

令和2年2月4日（火）から6日（木）までの3日間，附属幼稚園年長児30名が小学校にて小学校体験を行った。また，2月10日（月）の入学周知会の折には，一般入学予定者40名を含めた全70名の幼児が，1時間30分程度の小学校体験を行った。実施に際しては，事前・事後に幼小教員が合同協議し，なめらかに接続できるよう，且つ，幼小の子供たち双方に教育的効果が感じられるよう工夫した。効果と改善点については，幼小教員の見とりや保護者へのアンケート調査などによって行った。

本稿では，実施の様子と効果及び改善点，附属幼稚園からの連絡進学者と一般入学者との不安感の違いを報告し，小学校体験における幼小交流の留意点とスタートカリキュラムへつなぐ留意点について考察する。

1　附属幼稚園年長児の小学校体験（2月4日から3日間）

（1）はじめて小学校の教室へ

・自分の名前を探して大喜び

・自分の席に座って小学生気分に

・幼児の「鞄はどうしたらいいの？」のつぶやきから

・マークや番号を手がかりに

幼教員の振り返りから

〇机に貼られた自分の名前を探すのはうれしそう。困っている友達に気付いて一緒に探してあげる姿も見られた。

●慣れない環境に身を置いたことに不安を感じて，担任の言葉を待っている子もいた。

●小学生のロッカーに、出席番号と個人マークの2つの情報が記されていてとまどう子もいた。

→<u>情報の伝達方法の工夫（発達支援の知の活用）</u>

（2） 2年西組との交流（おもちゃの国へおいでよ）

・教えてもらう

・やってみる

・一緒に楽しむ

幼小教員合同の振り返りから

㊐ 2年生もゲーム進行を楽しんでおり，それが幼児にも伝わったように思う。ゲームを一緒に楽しむ姿が印象的。年長さんのことを思いながらも2年生自身がわくわく感をもって取り組めた。自分たちが楽しいから年長さんが一緒だともっと楽しくなりそうだという期待感が準備の時から感じられた。

㊍ 最初は説明を聞くことが多かったが，だんだん夢中になり「もう1回させて」などと気持ちを表出できるようになった。

㊍ 難しいコース，簡単なコースなど選択できるように2年生が工夫してくれていたため，幼児も構えることなく楽しめた。

㊌ お客さんが少なくなってきたら，呼び込みをしたり，実物を見せながらさそったり，遊び方を変えてみたりする等，2年生なりの工夫ができていた。

＜効果的になった要因＞

・好きな遊びを選択できたこと　・一緒に楽しめたこと　・遊び方を工夫できるものであったこと

（3） 2年東組との交流（いっしょになわとびをしようよ）

・一緒にとんで

・遊びのバージョンを広げて

・見せ合いっこをして

幼小教員合同の振り返りから

㊍ 幼稚園でも経験しているので，小学校の広い体育館で跳んでみたい気持ちがよく現れていた。

㊍ 大縄は難しかったので，実際に見せてもらいイメージがわいた。縄に入るタイミングに背中を押してくれたり，「1，2，3，はい」とかけ声をかけたりしてくれてよかった。

㊍ みんなでやっていく力やがんばる雰囲気を幼児なりに感じ，幼稚園でも練習しようという気持ちになった。

㊫ 始まる前から，2年生は張り切っていて，いつもの体育より意欲的であった。
㊫ 二重跳びや大縄を見せた場面では，幼児より「すごい」と声を掛けられ，自信たっぷりの笑顔であった。
㊫ バージョンを広げていくと，児童自らが積極的に幼児にかかわり，一生懸命教えていた。
㊫ 見せ合いっこでは，双方から拍手がわき上がり，楽しさとがんばりを共有する良い時間となった。

＜効果的になった要因＞
・幼児の経験が活かせるもの　・園でもやってみたくなるもの　・見せ合えるもの
・幼児に褒めてもらえる場　　・小学生が個別支援しやすいもの

（4） 5年西組との交流（お正月遊びをしようよ）

・5年生が工夫したコーナーを紹介

・一緒にカルタ取りを（幼小連携支援員さんも一緒に）

・一緒に双六を楽しむチーム

幼小教員合同の振り返りから

㊥ とても盛り上がった「歌カルタ」。「ちょうちょ」や「雪」等、親しみのある歌が題材となっていて、読み札を読んでくれるお姉ちゃんが歌いながら読んでくれた。明るい雰囲気が心地よく、分かりやすかったこともあり、多くの子ども達が集まっていた。
「青組さんが楽しんでもらえる活動を考えよう」と企画から運営まで子供たちが考えていった。その中で「苦手な人が少なくて、誰でも楽しめること」として子供たちが考えたのが、すごろく・カルタ・トランプ。すごろくを自作したり、場所が分かりやすいように看板を作ったり相手意識をもって考えていく姿が見られた。
㊫ ゆったりと関わる5年生。さすが。双六やトランプを自宅から持って来てくれており、幼児に合わせて「これはうどんカルタだよ」「金のトランプかっこいいやろ」と的確に説明が入り、やりたい気持ちが生まれていた。
㊫ 実際の活動では、青組さんとペアになって活動することで、普段自分から行動することの少ない子も、ペアの青組さんに「何がしたい？」と尋ねたり、場に移動して道具を準備したりして進んで行動していた。
㊫ 5年生の感想でも何より多かったのが「（自分たちが）楽しかった。」ということだった。「青組さんが喜んでいる姿を見て、自分も楽しかったしうれしかった」と感想をもつ子が多かった。

㊫ やりたいことをとことんやらせる幼稚園生活と時間枠のある小学校生活へどう切り替えていくかが課題。
→時間枠になじませるステップの試行［予告と見通しの繰り返し：始めと終わりの合図の工夫（音楽），全体の時間の予告と進行状況の見える化（タイムタイマーの利用）など］

＜効果的になった要因＞
・カルタ，双六など，ペアや小グループ型の遊びの有効性　・自主的な企画，運営
・相手が喜んでいることがうれしいと感じる心

（5） 5年東組との交流（リレー遊びやなわとび遊びをしようよ）

・一緒にリレー

・大玉ころがし勝負

・ペアでなわとび

＜5年東組との交流後の休み時間の様子より（フリータイム設定の有効性）＞

・広い運動場で一緒にサッカー

・こまを回してくれるやさしいお兄さんと

・小学校にしかないおもしろい遊具で

幼小教員合同の振り返りから

㊊ 5年東組の児童が靴箱まで迎えに来てくれ、運動場へ移動。ビブスでチームが分かるようになっており、自分がどのチームか、自分の場所はどこか等がすぐに分かった。→情報の伝達方法の工夫（UD）

㊊ なわとびでは，ペアなので、普段なわとびに向かわない幼児もやろうとしていた。二重跳びに向かっている2人の幼児は、お兄ちゃんに「すごいなあ」と言われて、何度も跳ぼうとしていた。

㊊ 5年生の二重跳びを目の当たりにした後の幼児の跳び方は、大きく変わった。→あこがれを

㊥ 幼児と出会う日までに「不安なく小学校に慣れてほしい」「小学校が楽しいところだと感じてほしい」という目的を全員で共有してどんな活動にすればよいか話し合ってきた。「ドッジボールやサッカーは苦手な子は嫌だよね。」「リレーもただ走るだけではみんなが楽しいとは思えないよ。」と意見を出し合い計画した。

㊥ 当日は，限られた時間の中，伝わるように一生懸命説明していた姿が頼もしかった。全体で伝えたことを1対1でも伝えようと子供たちは努力していた。

㊥ なわとびは個人差があるので，幼児がしたい跳び方を優先する流れで，それぞれが活動を工夫できていた。

㊥ 幼児も終始笑顔で楽しい交流になった。新6年生として新入学を迎えるよい場となった。

㊊ この日、幼児に予定（だれと何をするか）を説明し、活動への期待を膨らませる時間が不十分であったため、進行役の人の「今からリレーの説明をします」の言葉に不安を感じて、担任を捜す幼児がいた（予告が重要）。ペアの5年生が「大丈夫。手本を見せてくれるから」と言ってくれて、なんとかその場に留まることができた。

㊊ 幼稚園のねらいは「上級生と関わり親しみを感じる中で、小学校生活に期待し安心する」こと。お手本の際に自分のチームのお兄ちゃんに親しむ時間をつくり、一緒に応援するなどすれば、自分のチームやリレーそのものへの愛着や意欲、そして5年生への憧れが育まれるかも知れない（共に応援する姿を）。

＜効果的になった要因＞

・情報伝達の工夫（UD：色分け，繰り返し）　・安心感を与える声かけ　・あこがれをもたせるモデル提示

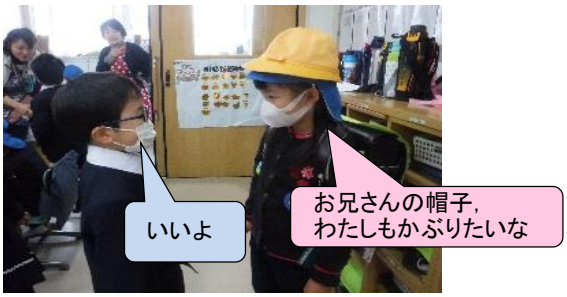
・目的意識をもった企画運営　・個人差への対応可能な種目

（6） 1年東組との交流（1年生の生活をしてみようよ。）

ｉ 教室で

・手をつないで案内

・興味深そうな幼児たち



幼小教員合同の振り返りから

㊙小学校の先生に褒められたりふれ合えたりする時間は格別。
㊙算数セットから黒板まで細かく教えてもらいながら「これは？」と新たな興味で聞く幼児の姿や制服も着させてもらってとても嬉しそうな姿が印象的だった。
㊙はじめは，緊張気味であったが，幼児とふれ合ううちに表情も和やかになってきた。
㊙実際に幼児を目の前にすることで，自分たちが知っている小学校のことを教えてあげたいという気持ちが高まりお兄さん，お姉さんとして行動しようとすることができていた。普段の様子とは違う一面を見ることができた。
㊙自分たちが教えたいことを一方的にするのではなく，相手の意見も聞きながら，その幼児の必要感に応じた対応をすることができていた。

㊙あるペアは二人で黙々とポケモンを描き，たまにお互いの絵を確かめる姿が，会話はまったく無いが関係が深まっている様子に見えた。一方でT幼児は黙々と折り紙で全ての時間を費やす。心の揺れが見えた。
ペアによる違いがよく見えた。幼稚園と小学校のねらいを十分に理解し合った上で，それぞれのペアの興味関心や関係作りに合わせて活動の流れや時間の持ち方は事前の打ち合わせに加え当日の様子に合わせていく必要がある。<u>→個人差への対応，発達支援との関連</u>

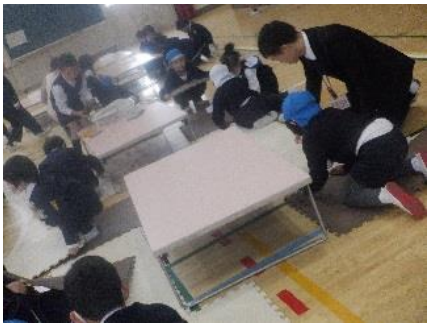
＜効果的になった要因＞
<u>・最下級生だった1年生が，お兄さんお姉さん意識をもったこと　・小学校教員の幼児への声かけ</u>

ⅱ　体育館で（鬼ごっこ，お店屋さん「独楽，あやとり，色塗り，折り紙，ドミノ，ブロック」）

・先生も一緒に

・応援の先生にも熱が入る

・本気で走ったよ



・出店を手伝う幼児たち

・幼児のほぐれた表情

・みんなで巨大ドミノに挑戦

幼小教員合同の振り返りから

㊐ 鬼ごっこは，する方も応援する方も大盛り上がり。一番盛り上がったのは小学校の１年生の先生が鬼ごっこに入ってくれた時。全員本気で，笛が鳴ったとき１年生が床に倒れ込むほど。その熱量が幼児にも伝わっていた。

㊐ 誰よりも本気でドミノに向き合っていた小学校１年生担任の姿を見て，幼児たちも，ドミノが何度も倒れても，楽しみながら閉店まで並び続けていた。→先生が仲間に入ることの意味は大きい

㊐ 次がお店屋さんだと分かると，自分たちも準備に取りかかる幼児。見よう見まねで準備し，やる気がみなぎる。

㊥ T幼児も先ほどとまったく違う表情。幼児の表情がほぐれた。

㊥ 鬼ごっこは，幼児のためにわざとゆっくり走ってあげたり，つかまってあげたりするなど優しさが見られた。
お店屋さんでは，自分のお店に来てほしいという願いから，どんな準備をしたらよいか，どんな声かけをしたらよいかを事前に考えることができており本番でも実行できた。

㊥ してあげるだけではなく，自分たちも一緒に楽しめたのが幼稚園の友達にもよかった。と振り返りで児童が話していた。

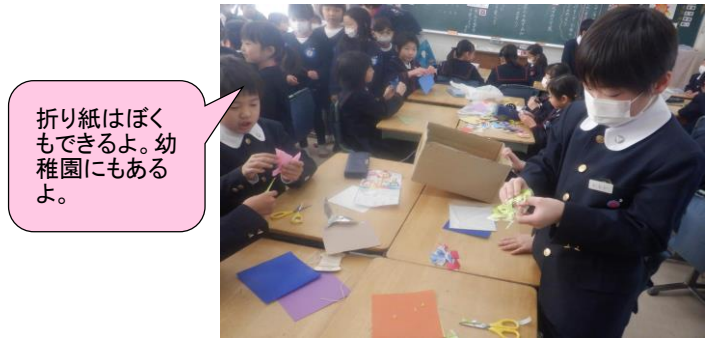
㊐ もてなす側・される側という交流活動の再検討→一緒に準備，一緒に楽しむ場の提案

＜効果的になった要因＞
・一緒に準備できたこと　・一緒に楽しめたこと　・先生が仲間に入ったこと

（7）学校探検をしよう（幼教員による観察記録）

ⅰ　2年生活科

幼稚園の遊びに似た雰囲気だったからか，大きな緊張感なく教室の中へ入った。
2年生も，進んで自分が作っているものを幼児に見せたり，触らせてくれたりした。「飾りを作っているんだ」と自分のねらいをきちんと理解し，学習できている姿に触れることができた。



幼稚園の生活とよく似ている教科もあるんだね

ⅱ　3年算数

・小学生らしい学び方に初めて触れる

・かっこいいなあ

・一緒に聞き入る幼児たち

教室の前に差しかかると，「どうぞ」と招き入れてくれた。小学生らしい学び方に初めて触れた瞬間であった。先生の問いに手を上げ，指名された人が前で説明する姿にびっくり，興味をもったのか，幼児たちはどんどん前に来て，3年生の説明に聞き入っていた。何を思っているのだろうか。

ⅲ　5年社会

・寄ってきてくれてうれしそうな5年生

社会科の先生と5年生が歓迎ムードで迎えてくれた。自分のまわりに集まる幼児たちに5年T君もまんざらではない様子。傍らにきた幼児に「教科書触ってもいいよ」と見せてくれるお姉さんもいた。
想定外の出来事で，小さい子への接し方が温かいことに，上級生の育ちを感じた。
また，休み時間にも会う小学校の先生に声をかけられるのはうれしそうであった。

＜ 効果的になった要因＞
・わくわく感が高まる，小学校の人，もの，こととの出会い。　・小学校教員の声かけ

幼小教員合同の振り返りから

㊙教師の問いに手を上げた場面は3日間の小学校体験で，子供たちの気持ちが高まった瞬間の一つだった。これこそ，彼らがやりたかったことだと感じた。→小学校スタイルへのあこがれ
㊙小学校の先生が好きになったH児は「〇〇先生って言うんやな」と名前を確認していた
㊙指示の言葉は使わないように意識した。
㊙入学直後の様子が想定できてよかった。
＜効果的になった要因＞　・小学校スタイルの授業へのあこがれ　・まねっこ　・活動の単純化

（9） 給食体験

・調理員さんが教室へ
朝7時から調理し始めていることをしり驚いた。

・初めて見た給食
大きなボウルにおかずがいっぱい

・苦手な食べ物を言えたよ
給食に不安を感じる幼児には，慣れた人間関係の中での初チャレンジが安心につながる。「苦手だと言えたこと」が大切

・おかわりができたよ
調理員さんとの出会いや友達と一緒に食べることがきっかけとなり，4回おかわりをした。母親の安心につながった。

これなら，あっという間に
食べられそう

「わんこそば」方式で

小学校で給食が食べられるか心配な人に食べられたという自信をつけさせるため，始め器に盛る量はごく僅かにして，何度もおかわりできるように配慮する。
そのおかげで，給食に自信が持てた人が増えた。
＊体験前　給食が不安な幼児　5名
　体験後　給食が不安な幼児　0名

２　一般入学者との合同の小学校体験（2月10日，入学周知会を利用して1時間30分程）

（1）　概要

次年度最上級生になる5年生が「不安を解消してほしい」「小学校は楽しいところと感じてほしい」という願いを共有して企画・運営を行った。プログラムは以下の通りである。

①自己紹介（じゃんけん紹介…勝った人から名前・好きな食べものを言う）
②絵本の読み聞かせ
③プラ板でキーホルダー作り（入学式に渡す）
④折り紙
⑤５年生によるエンカウンター（３時のおやつ・落ちた落ちた，
　　周知会が長引いたため５年生が臨機応変に実施）

・椅子に座って先生の話を聞く

・絵本の読み聞かせ

・違う幼稚園のお友達と

・プラ板づくり

・皆の心が和むエンカウンター

幼小教員合同の振り返りから

㊀「絵が上手だね」など５先生がペアの幼児に視線を合わせて丁寧に話す姿が印象的。褒めてくれるので，幼児は自然と笑顔になっていた。
㊀５年生の企画力，当日の様子に合わせた応用力や主体性などが発揮される場としてとても良いと感じた。そのため事前の話合いから企画，当日の運営や事後の振り返りなどの時間の充実が必要だと感じた。
㊀プラ板作りはペアのモノを作ることで繋がりができるよい活動。一方で「同じキャラクターで無いとダメ」と言われることで我慢する幼児の姿が気になった。プラ板作りという活動のみが継承されるのでなく，何のために作るのか，その為にどんな事を大切にするのか、５年生の目的意識の継承が優先されるといいなあと感じた。
㊁自分たちが６年生になった時の１年生という意識で，責任感をもって活動に取り組めていた。自分よりも小さい子供に対して優しい言葉かけをしたり，手を引いてあげたりして頼もしかった。「かわいかった」「入学式が楽しみ」などの声も聞けた。
㊁プラ板作りの際，幼児が自分が作りたかったものが作れなかったという声を聴いて，休みの日にプラバンを作成して持ってきてくれる児童もいた。
㊁幼児たちからは，いよいよ小学生になるんだ，という意気込みを感じた。私が話をすると，すぐに静かになって前を向き，一言一言，かみしめるように聞いてくれた。５年生の言うこともしっかり守って活動することができていた。<u>→期待感，はりきり感</u>
㊁何度も指示をしないといけない幼児は数名いた。全体指導の中で発達支援・UDの視点は必要だと思った。

３　保護者アンケートからの効果の検証

（1）手続き

家庭での子どもとの会話から，下記のことを調査した。連絡進学者は，小学校体験の前後の2回実施，一般入学者は小学校体験直後に1回実施した。

＊同様の調査を入学後からスタートカリキュラムが終了する5月中旬まで毎金曜日に実施し，子どもの不安感と楽しみ感の変容を捉える（ミッタメールシステムの活用）。

Q1「お子様は、小学校入学を楽しみにしていますか」
（4件法：・はい　・どちらかといえばはい　・どちらかといえばいいえ　・いいえ）と「どんなことですか」（自由記述）
Q2「お子様は、小学校入学に不安を感じていますか（4件法）と「どんなことですか」（自由記述）
Q3「保護者としてお子様のことで小学校に伝えておきたいことはありますか」（自由記述）

（2）調査結果

ア　連絡進学者

○　小学校体験直前

Q1 「楽しさ保持率（Q1に・はい　・どちらかといえばはいと回答した割合）」　・・・**89．5%**
Q2 「不安感保持率（ Q2に・はい　・どちらかといえばはいと回答した割合）」・・・**36．8%**
＜楽しみなこと，自由記述より＞
・勉強　・給食　・新しい場所で新しい友達　・ひらがなを書くこと　・サッカー　・かわいい制服　・ザリガニ捕り
＜不安なこと，自由記述より＞
・給食　・場所が不安　・登校　・勉強
＜保護者が伝えておきたいこと＞
・耳を傾けるようにしてほしい　・マイペースで時計がわからない　・アレルギー

○　小学校体験直後

Q1 「楽しさ保持率」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**100%（＋10．5%）**
Q2 「不安感保持率」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**20．0%（－16．8%）**
＜楽しみなこと，自由記述より＞
・勉強　・鬼ごっこ　・給食　・なわとび　・お兄ちゃんと一緒　・算数　・机並べ　・小学校の先生が優しい
・制服　・ランドセル
＜不安なこと，自由記述より＞
・登校　・勉強ができるのだろうか
＜保護者が伝えておきたいこと＞
・人前で注意されることを嫌う

○　小学校体験を終えての保護者の声

・盛りだくさんの貴重な体験をさせていただき，出来事を一生懸命話してくれた。
・好きなことにとことん向き合えた幼稚園時代のおかげで何にでも挑戦し粘り強くやることができるようになった。
・給食に不安を感じていたが，小学校体験で自信がついたようだ。
・小学校への不安を口にすることは無くなった。
・「5年生の友達ができた」と言っていた。
・幼小連携をこれからも続けてほしい。

（イ）一般入学者（直後のみ）

○　小学校体験直後

Q1 「楽しさ保持率」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**100%（連絡進学者との差　±0）**
Q2 「不安感保持率」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**71．8%（連絡進学者との差＋51．8%）**
＜楽しみなこと，自由記述より＞
・友達と遊ぶこと（20）
・勉強，授業，宿題（20）
・体験入学でお世話になった5年生に会える（5）
・校内探検（4）
・給食（2）
・姉と一緒に通える（2）
・ランドセルが背負える（2）
・なかよしタイム（1）

＜不安なこと，自由記述より＞
・友達ができるか（13）
・通学が不安（JR含む）（13）
・給食が残さず食べられるか（7）
・授業がわかるか（7）
・授業中にトイレに行きたくなったり，気分が悪くなったりしたらどうしたらよいか（1）
・テスト（1）
・休まずにいけるか（1）
・早起きができるか（1）

＜保護者が伝えておきたいこと＞
・給食に関すること（4）
・日常生活，身の回りに関すること（4）
・トイレに関すること（1）
・通学に関すること（1）
・友達ができるか（1）

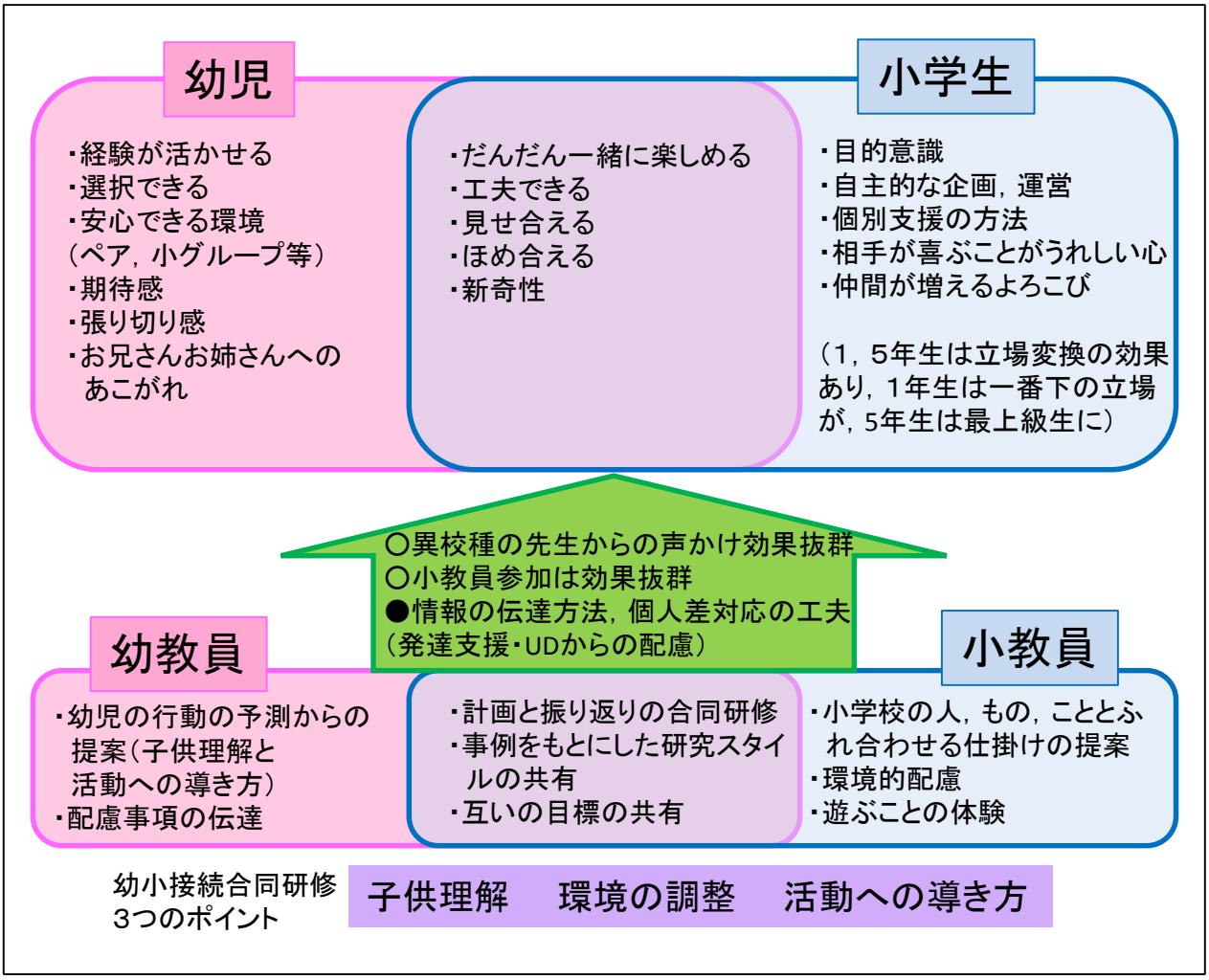
（3）考察
○　連絡進学者の小学校体験の前と後を比較して
・楽しさ保持率は89．5%から100%に増え，不安感保持率は36．8%から20．0%に減った。
・楽しみなことの記述は，なわとび，算数，お兄ちゃん，ランドセル，小学校の先生など，小学校体験で経験した具体が現れていた。小学校体験で人，もの，こととしっかり関われた効果と考えられる。
・不安感の記述は，体験前に書かれていた「給食」と「場所が不安」が体験後には無くなり，「勉強ができるのだろうか」と「登校」だけが残った。給食では「わんこそば方式」でおかわりを経験したこと，場所については，広い小学校で伸び伸びと活動したことが影響しているのだろう。
・楽しい活動の直後のアンケートということも好結果につながったのかも知れない。小学校入学まであるいは，小学校入学後に様々な心配事が出てくるのであろう。幼小の連携を一層図りながら，入学後のスタートカリキュラムにつないでいく。

○　連絡進学者の直後と一般進学者の直後を比較して
・どちらも楽しさ保持率は100%であり，小学校体験を経て，小学校入学への期待は高まっている。スタートカリキュラムにスムーズにつなげ，それぞれの園で経験したことが，互いによいように交流し新たな期待感がもてるよう工夫したい。
・不安感保持率は連絡進学者が20%，一般進学者は71．8%であった。一般進学者が不安に思っていることは，①友達ができるのか（13）　①安全に通学できるのか（13）　③給食が食べられるのか（7）　③授業が分かるか（7）　の順である。入学式後のスタートカリキュラムでの「なかよしタイム」で新しい友達と楽しく遊べる場を設け，早く，この不安感を取り除いていきたい。
・登校に関する不安は，周知会でリハーサルを呼びかけた。次の日，早速，親子で登下校のリハーサルをしている姿を見かけた。親子リハーサルの大切さを広げたい。
　今年度から開始した入学式前日リハーサルだけではなく，春休みに親子リハーサルデーを設けて，教室や校庭を開放してもよいかもしれない。

4　まとめ

幼小教員合同の振り返りより，見出した効果的になった要因と課題に対する改善案から，幼小の接続を実施する上での留意点を下図にまとめた。また，スタートカリキュラムへつなぐポイントを考察した。

（1）小学校体験における効果的な幼小交流の留意点



（2）　スタートカリキュラムへつなぐポイント

入学直後から5月の上旬頃まで，登校後の「なかよしタイム」を設けている。これは，まず，担任の先生や新しいお友達と仲よくなりたいなあ。はやく，小学校の教室や体育館の環境に慣れたいなあという，子供の期待に応え，安心感をもたせるためである。

なかよしタイムに用意する環境は，今回の小学校体験が役に立つ。上図で示した，これまでの経験が活かせる遊びを用意すること，遊びが選択できること，安心して遊べるようペアや小グループ，また，個人でも遊べる環境を用意すること，先生も一緒に遊ぶこと，などである。3月中に他園の子供の情報を収集したい。

また，情報の伝達方法や個人差に応じた対応に発達支援・UDの視点を取り入れることは欠かせない。様々な子供が一堂に会する，大切な時期である。スタートカリキュラムも幼小の教員で上図のような合同研修で進めたい。